

# 少女と竜

工学部  
電気電子情報工学科2年

山田 彬広

空が見えないほど頭上を覆い尽くす緑の隙間から見える光に、神秘的なものを感じた僕はそれを身体中に浴びたいと感じて大きく身体を反りながら深呼吸をした。だからと言って突然力が湧いてきた、なんて事はなかったもののとりあえずは疲労感を紛らわす事はできた。少し気分も楽になり、また一步森の中を進む。

こんな辺境の地を歩いているのには、訳がある。というのも単純な話で、僕が街を観光するよりも秘境を探索する事の方が好んでいるからである。両親からはよく「そんな危ない場所に行かないでちゃんとした職についてくれ」と言われるのであるが、どうせ家を継ぐのは兄なのだから、放っておいて欲しいと思った。とはいえ、働こうと思えば、魔法学校卒の経歴を活かして魔法医師や魔法学校講師などを目指してもよかったのかもしれない。だが、一箇所にとどまるというのはどうも自分には合っていないような気がしたから、行く先々の学校で非常勤講師をしながら、旅費を稼い

ではまた違う場所に向かう、を繰り返していた。今この国が何カ国目だったか、と思いつくそうとして、途中から数えるのをやめたのを思い出した。とにかく、そういう人間である自分は、両親の言う事など守る訳もなかった。

だから、家を出て一人で旅をしているのだが、文句を言われるとわかってはいるのにたまにふらつと帰るあたり、やっぱり家の温もりは今でも求めているのだろう。今度はもう少し短い間隔で家に帰ってみようか、などと考えて歩いていたのが悪かったのだろうか。森の近くの村で狩人から買ったこの辺りの地図のルートから少し外れてしまった。目的地がしつかりとあるわけではないが、帰る事を考えれば道のわかる場所にいた方がいい。見知らぬ地図もない場所ではよく迷子になるほどの方向音痴な僕は、特にだ。方向音痴なのにどうして旅をしているのか、と問われれば道に迷うかどうかのスリルを味わうため、などとぼざいてしまふくらいにはこの状況を楽しめるが、かといっ

て、迷いたいかと言われたら、しない方がいいのはあたり前の話だ。あちゃあ、とつい声を漏らす。そんな声を聞く人間などこのあたりにほとんどいないとわかってはいるのに、周りの視線を気にしてしまうのは、一応都会生まれという証拠なのだろうか。

そこまで考えて、ため息をつく。こんな事を考えていても仕方がない。まずは元の道に戻ること考えた方が有意義だ、と自らを叱咤する。いくらか惰性で歩いていたとしても、流石に地図から大きく外れた、なんて事はないだろうと考えて場所を推測しようと思ったが、どうしてもわからなかった。どうやら、完璧に道に迷ったという状況らしい。

となれば、まずは食料と水を確保するべきだろう、と思考回路を切り替える。一応、現状では五日分の非常食と最低限度の水をリュックサックに詰め込み背負っているため、五日は保つと考える事はできるがハブニングがあるかもしれないと思

うと、三日程度と考えるべきだろうか。となれば、その間に森から出るか、水や食料を確保して生存を最優先にするかの二択となる。

すぐにでも森を出る自信があるのであれば前者一択なのだが、そういうわけでもないのです、まずは生きる事を考えよう、と選択肢を狭めておく。いざというときに選択肢が多いと迷って結局何もできなくなってしまう、という経験が僕にそうさせたのだ。あの時は大変だった、と思いつきだけで冷や汗が出た。

一つ一つ考えていって、やる事を決めていく。だが、食料はともかく水を見つけられる気がしなかった。魔法によって水を確保する、という手も考えなくもなかったが、魔法を使うということでは体力を消費するという事であるため、やめることにした。魔法学校卒なんて、魔法学校で講師をするか魔法で敵に攻撃する騎士になるでもしなきゃ、役に立たないものだと改めて実感する羽目になった。とにかく、水を探そうと思って地図を見れば、川は森の奥地の方向にあった。

ここで問題となっているのは、奥地の途中で地図が途切れていることだった。それについて、地図を売っていた狩人は「この地図の北端の先には行くなよ。そこは人が入っちゃいけない場所なんだ。入ったら最後、帰れない。小さい頃に俺はそ

う教わったし、少なくとも、俺の知る限り、地図の外に出ると宣言した奴らは帰ってこなかった。……だから、行かないでくれ」と懇願していた。つまり、よほど危険なのだろう。その時、僕は「わかりました。それじゃあ、地図の中で探索しますね」と言い返したのだが、意図せずその懇願を無視してしまったという事になる。……となると、下手に動くのも危ない。

「さて、どうしたものか」

特に意味もなくそう呟く。口に出して、気分をごまかしたかった、という意味を持たず事はできなくなかったが、現状を打破できないという意味では、やっぱり意味のない呟きだった。

そんな呟きだったというのに。

「どうかしたの？」

その呟きに、誰かが反応した。ソプラノボイス、きつと少女なのだろうと声だけで判断する。少なくとも、歳はそういつていないはず。そんな少女がなぜこんなところにいるのだろう、と思いつつ声のした方向、先ほどまで誰もいなかったように感じた背後を見るとそこには、綺麗な新緑のワンピースに身を包んだ十一、二歳ほどの黒髪の少女がそこにいた。

その姿は少なくとも、このような場所は似合わない。貴族かあるいは皇族のお嬢様か何かとしか

思えない高貴さを醸し出していた。だが、ここにいるのが当然と言っているかのような身のこなしで、こちらへ歩いてくる。

「いや、恥ずかしながら迷子になってしまつて。地図の道から外れてしまったんだ。村に案内してもらえるかな？」

ただ、とりあえず人であるのは間違いない。もとの道に案内してもらつて、今日は帰ろう。そう判断した僕は素直に道に迷った事を告げ、案内してもらおうと乾いた笑いをしつつ、そう言った。本当はこのような事を少女に対して言うのは恥ずかしいのであるが、命と羞恥心のどちらが大事かと言えば間違いなく前者であった。命は羞恥心よりも重い。そう考えたからこそ僕の質問は、予想外の言葉に打ち破られる。

「ごめん。村、わからない」

思わず「えっ」と声を漏らしてしまう。こんな森の中で、人間が生活するには不便でしかないこのような場所に、高貴な少女がいて、その少女は森の外にある村の事を知らない。そんな事があるだろうか。いや、様々な可能性を考える事はできる。だが、その可能性は明らかに微々たるもので、普通ではありえない。例えば、『この少女はどこかの貴族のお嬢様で、身代金目的で誘拐され、脱出してきたが森の周囲の事は知らない』だ

とか。やはり、何度考えてみてもこの可能性はあったとしても本当に少しであり、目の前にいる少女がそのケースである、とは断定できなかった。

「でも、私の住処なら案内できるよ。疲れているみたいだし、一旦休んだらどうかかな？」

彼女がそう言った事で、僕の疑念は更に大きくなる。狩人から聞いた話では、森の中、奥地には人は住んでいないという事だった。狩人が奥地を警戒していたがために少女の住処を見逃していたのかもしれないが、だとしたらこれから危険地帯へと向かう事になるわけだ。それは避けたい、と思いつつもこの状況では一人で行動する方がよっぽど危険に思えた。だから僕は、

「……ああ、わかった。案内してもらえるかな」

と少女に言う事しかできなかった。僕がそう言うのと、少女はこくり、と頷いて僕の手を掴んで歩き出した。

少女に案内されてたどり着いたのは、木々の途切れたところだった。上空から此処を見る事ができたのであれば円形に木々が途切れているのだろう。広さにして半径百メートルほどの広さ。道なき道を、狭い場所を歩いてきた僕にとってはかなり広いと感じた。久々の直射日光はとても強く熱く、とてもではないが快適なものではなかったが、

広い場所に出られたという事実が僕の気分を少し楽にしてくれた。

よく見てみれば、この空間には円形の中央には大きな木があった。既に枯れているのか、枝こそ残されているものの緑は見られず、まるでその木が悪さをして周囲の木を枯らし無くしてしまったがためにこの円形の土地ができたのではないかなどと想像したくなってしまっただけ、この土地には何か神秘的なものを感じた。

つい上着のポケットから筆と紙を取り出し、軽くデッサンした。芸術家でもなんでもない自分であるが、やはりこういう場所を思い出に残すにはデッサン、というよりもメモが大事だと考えていた。最近普及したカメラ、という見たものを記録できる機械は一般市民である自分は少し遠い物だった。魔法とは違う技術体系だったか。両親は魔法学校卒で兄も自分も同様という魔法一家な僕にはそういう機械というものはどうも馴染めなかった。とはいえ、魔法の才と機械の才はどうやら反比例する傾向にあるらしいと魔法学校の恩師も言っていたため、あまり気にする事もないだろう、とカメラの事は忘れて、目の前の光景を紙に描き込んでいく。

そんな様子を少女は不思議そうに見つめている。なんか、恥ずかしいところを見られた気がする。

て、少し頬が熱くなったのを感じた。少し、舞い上がっていたのかもしれない。そう思っただけはわざとらしく咳払いをして、一旦深呼吸をした。

「何してるの？」

「ん、いやなに。単純にこの風景を忘れないように記録しただけだよ。カメラ、って機械を使えば一瞬で記録できるらしいんだけど、僕には手の届かないものなんだよね。まあ、持っても使える気がしないんだけど」

「……へえ、そんなものが外にはあるんだ？」

「まあ、ね。このあたりじゃカメラを扱っている店もないだろうし、知らないのも無理はないか。自分の話に興味を持っていてくれるのは嬉しい事だけど、実物は持つてないんだ。……うむ、見栄を張って買っておくべきだったか？」

森の外の事を知らなさそうなこの少女に、興味津々の目を向けられると、どうもカメラを持つておくべきだったかもしれない、と思ってしまう。とはいえ、カメラを手に入れようにも旅をしながら旅費を稼いだりと行きあたりばつたりな生活をしている僕の収入では買えそうにないし、買えたところでそれを果たして扱えるのかという問題が残っている。やめておくべきだろう、と諦めることにした。

「じゃあ、今度、見せてもらえる？」

諦める事にしたのだが、期待の目で見られるとどうもそうは言っていられない、と思ってしまうあたり自分は甘いのだろう。いずれ結婚し子供ができたら自分は親バカへ一直線のだろうな、と無駄な事を思いつつも「そうだな、今度入手できていたら持ってくるよ」などと宣言してしまった。全く、勢いで決めたらロクな事にはならないというのに。何をやっているのやら、と内心で自嘲しつつも口元はつい緩んでしまう。目の前の少女と話しているだけで、疲労感が吹き飛んでいく気がした。アニマルセラピーだとかそういう話を聞いた事があるが、そういった類のものかもしれない、と思った。少女に言ったら、否定されそうな単語ではあるが。

その後も、僕は彼女に森の事を話した。どんな話題にも少女は興味を示し、顔を輝かせた。また、彼女は彼女で森の事を話してくれた。つまり、彼女は此処の現地住民らしい、という事は確定したがそれ以外の事はよくわからないままだった。だが、この森の事について聞くことができたのは大きかった。話の一つ一つをメモする。そのメモが役に立つ事はないだろうと思うが、旅先の思い出はなるべく忘れず覚えてままでいたい、と思ったから僕はそうしていた。

そんな時だった。森の外から火の球が飛んできたのは。

一発、二発、と森に着弾する球。そうやって被弾した木々は火によって燃やされていく。それを見て、僕はただただ恐怖に身体を震わせ、ただ「えっ」と声を漏らす事しかできなかった。

ばさ、ばさ、と大きな音が聞こえる。虫の煩い羽音なんてものではなく、鳥の優雅に羽ばたく音でもなく。轟、と表現してもよいほどの大きな音。その音がした方向を見てみるとそこには、真紅の鱗に真紅の翼、身体の表面を陽炎が包み込んでいる竜が滞空していたのだ。口は大きく開かれ、煙が天へと伸びている。どうやら、先程の火の球は竜の口から放たれたものらしい、と推測をする。横目で少女の様子を見てみると、身体を震わせていた。無理もない、幼い少女が住んでいる森を燃やしている存在を見て、恐怖しないわけがない。そんな事を僕は思いつつ、どうするべきか考える。

逃げるか戦うかで言えば間違いなく前者だ。戦うつもりなど元よりない。そもそも、そのような手段など持ち合わせていない。いくら魔法学校を卒業したとはいえ、それは戦闘力に直結するかといえどどういいうわけでもない。魔法で戦う人間なんていうのは、そもそも旅なんかせずに騎士にな

っている。こうしてフラフラと旅をしている僕なんか魔法で戦えるわけがなかった。

故に、考えるべきは逃げの一手なのだが、思いつく気すらもしない。思考回路は空回りする。冷静に物事を考えなければいけないというのに、何も考えられない。頭が真っ白になるとはこの事か。とにかく、自分は何もできない。

だが、それでもこの少女は守らなければと思ったのは男の意地か。はたまた年長者としての意地か。ほんの一瞬、自分はどうなってもいいからこの少女は救いたい、と思った。その瞬間のことだった。

上空の真紅の竜は火の球をこちらに向けて放つ。万事休す、そんな時に、何故か黒かったはずの髪の毛が少し緑がかって見えるようになった少女は僕の身体を押した。小さな身体。だが、そんな身体からは想像もできない力で僕は十メートル近くも突き飛ばされた。え、という声を漏らす間もなく、少女は何かを呟いていた。一体何を、と思ったのとそれが何を意味していたのかに気づいたのはほぼ同時だった。強制退去魔法の系統の詠唱。呪文を詠唱する事で発動する魔法という技術体系のなかではもつとも難易度が高いとされる移動系魔法の一種。魔法学校の生徒でもできる人間はごくわずか。そんな代物の応用を、なぜそんな



に若い少女が行っているのか。僕には理解できなかった。呆然としていると火の球が着弾する寸前まで迫っていた。駄目かと思ったその時、少女が先ほどまではなかったはずの緑の鱗のような手甲をつけた左手を翳すと緑色の魔法壁を出現させて、防いでいた。詠唱もなしに魔法の壁を出すなんて事は、魔法学校の主席卒業の魔法使いでも不可能とされている行為だ。どうして、そんな事ができるのだろうか、などと考えていると少女は詠唱を終え、自分の足下に魔法陣が描かれていた。自分の足下にだけ。まさか、少女は此処に残るというのか。

「旅人さん、今日はいろいろお話できて楽しかった。久しぶりに、外に興味が持てたよ」

魔法陣がきらりと光り、あとは強制退去魔法の発動を待つのみ。おそらく、僕はこのまま森を強制的に退去させられるのだろう。つまり、ここから逃げ出すことが可能となる。でも、彼女はどのような。僕だけが退去するという事は少女はあの竜の攻撃に巻き込まれるという事ではないか。

「君は」

「私なら大丈夫。これは、私の役割だから」

そう言って少女はにこりと微笑んで、「またね」と言った。僕は「それはどういう事？」と問いかけようとしたが、その言葉が少女に届く前に僕は

森の外へと飛ばされて、詠唱に粗でもあったのか、その際に思いっ切り身体を地面に叩きつけられて、何があつたのかもわからぬまま僕の意識は途切れてしまった。

後で聞けば、あの後森では新緑の竜と真紅の竜が戦い、真紅の竜は森の木々から突如延びてきた蔓に絡め取られ脱出しようと木々を幾つも燃やしたものの新緑の竜の爪で鱗ごと切り裂かれて絶命したらしい。らしいとしか言えないのは、自分は意識を失っていて、地図を売ってくれた狩人に偶然拾われて、起きたときに彼から聞いたからだ。そんな彼はというと、「まさかこの目で竜神様を見る事ができるなんて！」と鼻息を荒くしていた。どうやら、この村の独自の文化として、新緑の竜を崇拜する文化があるらしく、昔からそういつた言い伝えがあるとの事だった。

とにかく、狩人の家でしばらく休ませてもらい、身体を少し癒やして僕は村を後にした。森は戦いの傷跡が残されており、幾本の木々が燃やされているのが外からも見えた。なんだか、前にメモに軽く描いたそれと形が変わってしまったことが、ただただ哀しかった。僕はそが変わってしまった風景をメモに模写してから、村を後にした。結局、あの時の命の危険というのが、これまで

で一番の恐怖であつたため、この旅を機に一旦旅に出るのをやめた。実家に帰ると、両親は泣いて喜んだ。兄は「これで貴族の家に婿入りできる」などと言っていた。まずは鏡を見て無理だと気付け、と思つたりもしたが、兄なりに僕の帰りを喜んでいのだと思うことにした。それから僕は、実家暮らしをして母校の魔法学校に講師として勤務しつつ、時折図書館で調べ事をしていた。あの日あの時見た真紅の竜。そして、見ていないもののそれを倒したらしい新緑の竜。その詳細を。

どうやら、昔はあの森に限定したものではなく、ある神話では神々の戦争において真紅の竜と対立し、木々を守り抜いたとされていた。そして、その竜は森の中においては人間の姿にもなるという。

まさか、と思った。

思い浮かんだのはあの少女だった。

あの日、僕を森から出してくれたあの少女。

思い当たる節なら、あつた。場所に似合わぬ高貴さ、幼さからは想像もできない魔法の実力。そして、緑の鱗のような手甲。それらが新緑の竜が人間に化けたものであるとするならば、どれも納得できる話だった。しかしながら、自らの領域を侵すものは排除する、という言い伝えも存在する。それが狩人が言った「地図の外には出るな」

の元なのだろう。ならば何故、自分は無事だったのだろうか。

などと考えて、何をしているのだろう、と僕は思った。

調べて何になるというのだろう。自己満足でしかないうえに、それを知ったところでどうするといふのだろう。

それに、あの日出会ったのはあくまでも少女で、新緑の竜ではないのだから。

「僕は彼女にカメラを見せに行く。その約束を果たせばいいだけじゃないか」

そう思った僕は資料を全て片付けて、図書館を後にした。

やる事は決まった。まずは、休みがもらえるように今ある仕事をとっと処理して、休暇申請をしよう。そう思った僕は気持ちよく一步を踏み出した。